

氏名	萩原 里香
ヨミガナ	ハギハラ リカ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第250号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 イタリア音楽劇の黎明期における「コラーゴ」に関する試論 —舞台上演責任者という職の成立をめぐって—

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	畑 瞬一郎
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	檜山 哲彦
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	杉本 和寛
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	大角 欣矢
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽研究科）	大森 晋輔
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽研究科）	侘美 真理

（論文内容の要旨）

本論文は、ルネサンス後期からバロック初期にかけて北イタリアで試みられていた、音楽を含めた舞台芸術において、その企画から上演までの一切を取り仕切っていたとされる、コラーゴ Corago という役職に焦点を当てたものである。コラーゴは、16世紀半ばより、マントヴァやフェッラーラなどに存在した知識人たちの集まりである、アカデミーの演劇活動において中心的立場にあり、舞台芸術に関する企画力と統率力を持ち、ときには宮廷をもその活躍の場としていた。イタリアにおいて舞台芸術は、音楽劇の誕生を象徴とするように、この数十年の間に大きく発展した。このような過渡期に、コラーゴという役職が存在したのである。

彼らが理念としたのは、「本当らしさ」という概念である。それは、アリストテレスに由来する、ルネサンス期に演劇の本質とされた概念であり、出来事を「ありそうな」仕方で組み立てて、目の前で本当に事が起きているかのように観客に思わせるというものである。音楽劇において「本当らしい」舞台を作ることは、歌って台詞を展開する音楽劇に慣れていなかった観客のために行った配慮であり、当時の観客の演劇に対する慣習を理解し、その許容に合わせようとする作り手側の姿勢である。そうした「観客のため」という姿勢は、純粋な演劇の時代から上演責任者として舞台を制作してきた、演劇人であるコラーゴの立場故のものだと考えられる。

このような背景をもって、舞台上演責任者であるコラーゴが「本当らしさ」という理念をもってどのように舞台を作り上げたか、そして実際にどのような立場の人がどのような活動を行っていたのかを考察し、コラーゴという役職が音楽劇の黎明期にいかなる面で必要であったのかを明らかにすることを目的とする。

本論文は、研究の背景や目的を述べる序章と4つの章、そして終章という構成になっている。

第1章では、コラーゴについての概要を詳述する。コラーゴに関する一次史料として最も重要な、1630年頃に執筆された不詳の著者による『コラーゴ—よき舞台を作るための考察—』に関して、現存する唯一の写本についての書誌情報についてまとめる。次にコラーゴの語源に関して、古代ギリシアのコラーゴスまで遡って言葉と意味の変化の過程を追う。そして、『コラーゴ』の全23章の題目を紹介し、そこで述べられる、コラーゴの仕事と定義についてまとめる。

第2章は、コラーゴの歩みと題し、コラーゴと目される3人の人物に焦点を当てている。コラーゴの役割がまだ必ずしも広く認知されていたとは言えなかった時代に、どのような場面で何を求められて活動していたのか概観する。また、そうした人物たちが著した論考や出版譜で述べられていることを考察し、『コラーゴ』以前の舞台上演責任者の仕事の一端を明らかにする。

第3章では、音楽劇が誕生しようとしている時期において、コラーゴたちが自然な舞台を制作するにあたって、「本当らしさ」という概念をどのように捉え、どのように取り組んでいたのかを考察する。音楽劇における「本当らしさ」は、歌で自己表現するという行為を自然ではないと受け取る観客に対して、それをどのように正当化するかが重要となる。コラーゴたちの考え方には、いち芸術家としての立場から「理想を追求する」という姿勢を見ることが出来るかもしれないが、むしろそのような純粋に芸術的理想や理念を追求する姿勢よりも、いかに舞台を成功させるかという舞台芸術家としての、さらに言えば、実務家として、興行家としての姿勢がにじみ出ていると考えられる。そのようなコラーゴの仕事を確認するのに大きな功績のあったのが、エンツォ・ベンティヴォッリオという人物である。

第4章では、そのエンツォ・ベンティヴォッリオに焦点をあてている。彼は、第2章で見てきたような先人たちの流れを汲みながらも、より幅広い権限をもって独自の活動を展開している。彼の人物像と彼が手がけた1628年のパルマでの祝典における仕事を検証することで、彼の活動が新たな独立した職としてのコラーゴを確認させたという事実を明らかにする。

以上のことより、次のように結論する。

音楽劇の黎明期には、上演の台本や音楽の制作段階での「本当らしさ」と、舞台上での具現にあたっての「本当らしさ」の釣り合いをとることが、困難であるが避けられない課題であった。それについては、詩人や音楽家などの直接の作り手たちとは別の、一定程度異なった価値観や視点から取り組むために、独立したコラーゴという職が必要だったのである。

(総合審査結果の要旨)

萩原氏の論文は、17世紀初頭に中部イタリアで上演されていた音楽劇のあり方について、作曲家や台本作家などの、いわゆる創作者に焦点をあてるのではなく、これら創作者に加え、演奏家、舞台美術家などの職人など、多くの人的な、またそれ以外の資源を総合的に統括し、音楽劇を実現するという、いわば今日のプロデューサーのような仕事を果たす人物に焦点をあてて読み解こうとする試みである。その中心的な研究素材は『コラーゴよき舞台を作るための考察』なる作者不詳の17世紀の論考であり、その精読から当時の音楽劇制作における現実的な問題点を探求するとともにコラーゴたる人物がいかなる理念のもとで仕事を遂行していたのかを描きだしている。後代において例えばヴェネツィアなどに登場したインプレザリオとは異なり、貴族のアカデミーやサークルに依存する部分は残しながらも、独自の人脈とノウハウを頼りに自律的な職域を持っていたことを示すことに一定程度は成功しているといえる。しかし、論考の細部に関する考察を支えるための枠組みを構築することができていたかと問えば、いささか不十分であったと言わざるをえない。とりわけ、コラーゴ、インプレザリオ、プロデューサーといった職が、具体的に何を同じくし何を異にしていたのかを明示し、それぞれについて歴史的な文脈を踏まえながら明確に論じておくべきであった。また、4章で行われている「本当らしさ」という術語をあげての考察は、かなり消化不良のまま残されてしまった。演劇史をすべて視野に入れることは不可能であるにせよ、その中心的なタームを素材にする以上は、その前後史を捨象してしまっているように見えるのが残念である。このような改善すべき欠点はいくつかあるものの、17世紀イタリアの音楽劇制作に重要であったコラーゴについてのまとまった論考としては、その学問的価値について一定の評価が可能であることを鑑み、博士論文として合格と判断した。